



会長講演



座長：島田 信也 (JCHO熊本総合病院 院長)



士魂商才

JCHO 理事

内野 直樹

略歴

昭和25年	静岡県で出生
昭和51年	北里大学医学部卒業
平成5年	社会保険相模野病院 入職
平成24年	JCHO東京蒲田医療センターへ異動
平成26年	JCHO本部勤務

自立運営可能な病院のみが、良質の医療を安定して地域に提供出来るという考えは論を待たない。特に公的病院においては、民間病院と比較し優遇策に守られての運営となっていることから、交付金に依存しない安定経営が求められる。経営評価には、周辺人口、提供する医療、病床規模等様々の要件を考慮すべきであるが、自立困難な都市部公的病院に存在意義はないといえよう。

即効性のある経営改善策として、病床数削減（職員削減）、投資抑制（経費削減）という手法が取られることが多く、経営に貢献しないと判断される医療安全、教育、研修、地域貢献等の部門は縮小される傾向にある。演者はこの手法を否定しないが、安易な実施は病院の将来性、発展性を大きく損なうものと考えている。

病院の中長期的展望を踏まえた経営改善策については、具体的な数値目標を設定し、全ての部署で生産性の向上を図ることは必須条件であるが、持続可能とするためには職員の意識改革（最も重要で最も困難）が必要である。演者は、これを達成するために倫理観を基本とする取り組みが効果的と考えている。これはまさしく医療人の魂（士魂）と言うべき根幹部分と言える。外部から羈縻（きび）されることなく、独立不羈（どくりつふき）を維持するためには安定経営（商才）を求められるが、利益のみを追及することは品性の卑しさにつながる。同時に、自立不可能な病院が机上の理想論を語ることは口舌の徒の誇りを免れない。

地域と共に生きていくことは、われわれが譲れない原点であり、それを支えるのは医療人としての誇りである。「嘘をつかない医療の実践」という基本方針を継続し、患者と共に病と戦っていくことこそがわれわれの存在意義となり、誇りを持った職員の努力は必ずや病院の自立、経営改善につながることを確信している。

本講演においては、「地方の小さな病院で普通の職員が倫理観に支えられ病院を再生した」自験例につき概説する。